日本学校教育相談学会岐阜県支部　　第２９号　令和４年 10 月 31 日発行

岐阜県支部だより

○巻頭言
○全国大会報告
○支部研修会報告
・第１回研修会
・第２回研修会

巻頭言「不登校特例校」の存在

岐阜県支部　副理事長　平林　克友

◆不登校特例校とは

文部科学省が指定している「不登校特例校」 の存在を皆さんはご存じでしょうか。令和４年７月１日現在、全国で 22 校の学校（小・中・高）が指定を受けています。その中で岐阜県には「西濃学園中学校」（2017）、「岐阜市立草潤中学校」（2021）、「西濃学園高等学校」（2022）の３校があります。

昨年８月に令和２年度学校基本調査での不登校児童生徒（年間欠席 30 日以上の小学生・中学生）が 196,127 人との発表がありました。　文部科学省が不登校児童生徒数の公表をした 1993 年以降、途中で一度は減少傾向になりましたが、それ以降は増加傾向に拍車が止まりません。その中で、現行の学校体制を弾力的に緩和することで、不登校児童生徒に対応する取り組みとして文部科学省が全国の小・中・高を対象にして 2004 年から「不登校特例校」の指定を始めました。

◆特例校の取り組み

そこで、私の勤務する西濃学園中学校の取り組みを紹介したいと思います。「学校らしい学校」「日本一あたたかい学校」をコンセプトに、不登校の生徒たちが一旦環境を変えて、豊かな自然に育まれながら、これまでの自分をふりかえり、今後の自分の進む道をゆっくりと自ら考えてもらう空間であることを意識しています。その中で教育課程では３つの独自教科「ライフプランニング」「リカバリー」「地域学習」があります。「ライフプランニング」では、担任とスクールカウンセラーが、ソーシャルスキルトレーニングの学習を行います。人間関係の構築の学びです。「リカバリー」は、当該の学年の学習補充するための小学校や中学校の復習です。「地域学習」は、地域に関わる教材を使って、時には地域の方々に講師になっていただき学習をしていきます。今年４月から学園では、不登校生を対象とした全日制高校を県から認可いただき開校しました。中学校で躓いた生徒たちが、週５日の学校生活に再度チャレンジするための場を提供して、様々な体験を通して社会に巣立っていけるようになって欲しいと願っています。

◆未来の学校のあり方

不登校生徒たちを通して私たちは、現在の学校のあり方を考え、これからの学校の行方を考えることが大切です。教育に公的、民間の別はありません。共に如何に不登校の生徒たちが再び「生き生きと自分らしく過ごせる場所」を提供できるかだと考えます。そのためには特例校の存在を通して、不登校生徒の取り巻く環境を十分に理解し、各学校の教員や子どもたちに関わる人たちとの連携や取り組みが必要です。現在、岐阜県では「岐阜県学校・フリースクール等連携協議会」を立ち上げています。その中心の会長には、当学会岐阜県支部の古田信宏理事長が就いています。このような取り組みが、現場の学校の先生方への示唆や提言に繋がるものと思っています。

「不登校していても、何でもなかった」「あの時のあの人のお陰で今の自分がある」など、不登校経験者で、現在自立して社会で活躍している人たちの言葉です。何がどのようにして、そのようになっていけるのか、決まった公式はないものの、私たちは現在悩んで苦しんでいる生徒たちや保護者のために、「未来に光」を灯していかなければならないと考えています。

☆　全国大会報告　☆

第３４回総会・研究大会（栃木大会）
大会テーマ　「災禍に向き合い、支え合い、つないできた学校教育相談を、子供の心の砦としてさらに充実させよう」

１　開会行事・総会より

会の冒頭、春日井会長は挨拶の中で、ウクライナ危機を大きな災害として受け止めることができるのではないか、全国各地で災害等が起こっているが、学校教育相談の視点はこの危機を乗り越えるために必要なのではないかといった話をされました。重ねて、来年度の新潟県支部主管の全国大会は８月５日（土）・６日（日）にオンラインのみで開催されること、令和６年度は愛知県支部主管で行われることが発表されました。

２　文部科学省講演

演題「コロナ禍における不登校の対応」
講師　文部科学省初等中等教育局児童生徒課
清重 隆信 課長

冒頭に不登校に関する各種調査結果の内容が示されました。その中でも「90 日以上の長期に及ぶ不登校児童生徒が多い」「最初に行きづらいと感じたきっかけについて、子どもを対象とした調査では、先生との関わりを理由としている児童生徒が３割程度いる」「休むことができて、ほっとした楽な気持だったが７割、自由な時間が増えてうれしかったが６割強」など、実態の詳細について聞くことができました。「不登校は問題行動ではない」「一人一人の子供に合わせて支援していく」「社会的自立を目指す」などの不登校に対する基本的な考え方を共有した後、教育支援センター・不登校特例校・フリースクールなど民間との連携・ICT の活用・オンラインカウンセリングの導入の検討といった対応の仕方について説明がありました。

「教室復帰がゴールだという認識がまだまだ強い」という話もありました。現場の教育関係者の認識を変えていかなければ、不登校に対する対応も不十分になってしまうということを強く感じました。

３　記念講演

演題「息抜く力は、生き抜く力」
講師　浄土宗光琳寺住職　井上 広法 氏
（宇都宮共和大学非常勤講師）

井上住職は、引きこもりの人、ＤＶの被害者、終末期の患者、遺族のケアを中心に活動されています。自身の経験を交えながら、立腰（腰骨を立てて学習・生活すること）・黙想など心を整えること＝マインドフルネスによって、ハイパフォーマンスが生まれる実例を紹介されました。マインドフルネスは日本やアメリカの有名企業で取り入れられています。

また、「命の積み木」という先祖を見える化したおもちゃを全国の小学校へ持っていって命の授業を行うことで、自分の命を大切にしようとする心情が芽生えることを伝えています。これにより、命はみんなから受け継いだものだということ、人とのつながりがなくなるだけで自分が存在することができないこと、そのような命だと思うと粗末にできないことなどを実感することができます。

４　自主シンポジウム
〔全５コース中、①コースに参加〕

グループカウンセリングを活用した
学級の仲間づくり（２）

「対人関係ゲーム」とは、個の変容よりも個々の関係性に焦点を当てたグループカウンセリング、システムズ・アプローチで、様々な困難を抱えた子供がいる学級集団に対して、予防・開発的支援として取り入れられています。小学校１年生の実践では、一緒にゲームに参加することで、児童の理解に役立つだけでなく、時間を共有することで得られる心のつながり、目の前で見ているので、正しい判断で指導できることなどのよさを紹介されました。小学校高学年の実践では、人と関わろうとする動機を高めたり、人の受け入れ方を改善したりすることに役立つことが紹介されました。そして、専門学校の実践では、ゲームを楽しむことで、早い時期にクラスの集団に溶け込め、人との距離が気にならなくなった。といったよさが紹介されました。

５　実践事例・研究発表

〔全 17 部会中、⑬部会に参加〕

教育相談コーディネーターの実際
～成功事例と失敗事例から見える
期待と課題～

近年、各校に教育相談コーディネーターを置くようになってきていますが、様々な問題点があります。例えば、教育相談コーディネーターの役割として、文科省からの通知では、実際のカウンセリングをすることは想定されていないけれども、教育現場では求められている点。教頭・特支コ・教相コ・養教との役割分担の線引きが難しいという点。教相コが管理職レベル並みの対応を求められることがあるという点。様々な問題点について実例をもとに紹介していただけました。次世代の育成では、ネクストコーディネーターの育成という視点で、次の担当候補の先生を一緒に仕事をやりながら育てる、管理職にはその視点も必要であるという話も聞くことができました。

６　夏季ワークショップ

〔全６コース中、Ｂコースに参加〕

今、求められる学習指導
～個に応じた学びの保障～
日本大学経済学部　教授　篠ケ谷圭太先生

教育心理学のキーフレーズと実践をつなげて、分かりやすく説明していただきました。

「個に応じた指導」「個別最適な学び」という言葉が教育現場に広がりつつありますが、それは、個別指導や補講を行えばよいわけではなく「学習効果・教育効果の最大化が一番の目的」であり、そのために個人差をどのように捉えるのか。そして、その対応方法を教えていただきました。

個人差には、大きく分けて「性格」「能力」「動機付け」「信念」の４つの視点があるという話になりました。グループディスカッションの中では、特に学習指導において「能力」「動機付け」が大きく影響があるのではないかという意見が出ました。能力については、学習障害を中心に取り上げ、どこでつまずいているのかを細かくチェックすることが大切であるという意見でまとまりました。

グループ討議では、学習についていくことが難しい子どもたちに対して、どのような視点で分析し手立てを考えていけばよいかについて視野を広げることができました。ICT の活用や小集団交流、少人数学級等、あらゆる手立てを現場で取り入れようとしていますが、それぞれの目的をはっきりさせ、子どもたちの実態（困り感）に合わせたものでないと無意味になることを、改めて感じました。　（文責：小笠原　淳）

☆　支部研修会報告　☆

◇　定期総会・記念講演

開 催 日：令和４年６月５日(土)
実施形式：対面・Web 開催

◎記念講演会　14:30～16:00

「自閉症スペクトラム症児の心の
発達と支援」
岐阜大学　教育学部教授　別府　哲先生

私たちの周りには独特の発達特性をもった子ども達が存在し、生きにくさや困難さを感じています。対人関係が苦手・強いこだわりがあるなどの特性が集団生活不適応を起こし、不登校になる児童生徒もいます。今回の研修は、どのような教育的方法を用いた支援が必要なのかを学ぶよい機会となりました。

＜自閉スペクトラム症の捉え方＞

障害というと「何かが欠けている」「何かができない」と見てしまいがちですですが、そうではなく「捉え方のずれ」があり「ユニークな形で捉えている」と考えた方がよいと教えていただきました。自閉スペクトラム症の人は、他者理解がユニークなため「共感される」「相手をわかる」「相手に自分をわかってもらえる」といった経験が少ないそうです。相手の気持ち、心がわかる「心」を育てることが重要であり、そのためには、SST やソーシャルストーリー、コミック会話などの様々な技法を活用していく必要性が分かりました。

＜集団作りと自己理解＞

どのように理解し支援をするとよいのかについては、「学級基準ではなく、その児童生徒に添った評価基準にして関わること」「目に見えるポジティブな評価」の２つが大切だそうです。また、教師がその子の世界を楽しむことや、気持ちの代弁が、他の児童や生徒との距離を縮め、共感される体験、更には、一緒にやりたい、関わりたいという気持ちにつながることを教えていただきました。

＜まとめ＞

発達特性をもった子ども達の存在は少数派で、多数派である定型発達者には分からない苦労や困難があるということを知りました。他者とのつながりや信頼が、共感される体験やうれしさを感じることにつながりため、まずは、共感することが大事な支援の一つであることを学びました。　　（文責：曽我部　恵美）

◇　夏季教育相談研修会（第２回研修会）

開 催 日：令和４年８月２０日（土）
実施形式：対面・Web 開催

「解決志向のブリーフセラピーを
教育活動に生かす」
目白大学　教授　　黒沢　幸子先生

「私、岐阜について詳しいんです！」とても明朗快活な黒沢先生の語りに引き込まれ、あっという間に過ぎた４時間半の研修となりました。

午前の部では、『解決志向アプローチ理論・発想のもち方』を、午後の部では、『解決志向アプローチを行うための具体』を中心にご講話いただきました。

＜解決志向アプローチとは＞

従来の原因追及や問題をいかになくすかに焦点を当てるのではなく、本人の持っているリソース（資源・資質）を活かし、望む未来イメージにむけて、具体的な目標を作り、新たに解決や未来を作っていく発想です。

＜援助のために有効な発想＞

中心哲学　プラグマティズム
ルール1：うまくいっているなら、変えようとするな。
ルール2：一度でもうまくいったらまたそれをせよ。
ルール3：うまくいかないなら、違うことをせよ。

＜リソースを見つけるために…＞

①　例外（うまくいっていること）に注目！
例外は、すでに起こっている解決の一部。

②　成功の責任追及＆コンプリメント
「どうしてうまくやれたのか」を明確にし、その責任を本人に帰して、また行えるようにする。

③　解決像・未来像を描く
・ミラクル・クラスチョン（奇跡のかけら）
・タイムマシン・クエスチョン（〇年後の自分）

④　万能の物差し
・スケーリング・クエスチョン（加点法・１上がった理由を尋ねる。）

⑤ 機能する目標づくり

1. 大きなものでなく、小さなもの
2. 抽象的なものではなく、具体的なもの
3. 否定形ではなく、肯定形で表現されたもの

＜まとめ＞

問題とリソースは常に隣りあわせであり、「問題の周辺にたくさんの能力がある」ということを教えていただきました。そして、グループワークを通して肯定的に自分を受け止める体験をし、私たち自身が笑顔とエネルギーを得た有意義な研修となりました。　　（文責：木村　由紀）

☆　事務局より　☆

８月に行われた第 34 回総会・研究大会（栃木大会）にて、岐阜県支部理事の小笠原淳先生（岐阜大学教育学部附属小中学校）が「小泉英二記念賞」を受賞されたので、ご報告します。

（文責：事務局長　郷田　賢）

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第 29 号
2022 年（令和４年）10 月 31 日発行
発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部
編集：日本学校相談学会岐阜県支部広報委員会
ホームページ：http://jascg-gifu.net/